第二章　民衆藝術の意義及び價値

一

所謂民衆藝術といふことが最近心ある人々の注目を牽くやうになつて來た。一體民衆藝術とはどう云ふ藝術を指すであらうか。特に民衆といふ文字を冠した藝術といふのはどう云ふ藝術であらうか。かういふ疑問は、民衆藝術といふ言葉乃至文字に遭遇したそれ〴〵の始めに於て、誰しも抱く疑問に相違ない。民衆とはいふまでもなく平民の謂である。すなはち上流階級を除いた中流階級以下勞働階級のすべてを含んだ一般民衆、一般平民の階級に屬する人々である。從つて民衆藝術とは平民藝術といふことに外ならない。更に言葉をくだいて云へば一般民衆乃至一般平民の藝術といふことに外ならない。

尤も、すべての藝術は見樣に依つては一般民衆のための藝術であると云へる。苟も眞の藝術であるならば、今更事々しくトルストイの藝術論を借りる迄もなく、誰人にも、上下貴賤の一切の階級を絶して、誰人にも理解され、鑑賞さるべき種類のもの、トスルトイの所謂「一般的藝術」であること無論である。從つてトルストイ一流の「一般的藝術」の立場に立つとき、特に民衆藝術なるものゝ存在理由を認めるに及ばないといふ結果にならないこともない。しかしながら、特に民衆のための藝術、平民のための藝術といふ以上、そこにはそれ獨特の意義があるべき筈である。民衆のためならざる藝術、平民のためならざる藝術と對比して、特に民衆のため、平民のためとして存在する特殊の意義が必ずそこにあるべき筈である。かの浩瀚なる『ジアン・クリストフ』の著者として現に世界的文豪の一人に數へられるフランスのロマン・ロオラン氏は、その著『民衆劇場に於て、又、かの現代における女流思想家の隨一であるスエデンのエレン・ケイ女史はその『更新的修養論』と題する意味深い長論文において、何れもこの民衆のための藝術、平民のための藝術といふことの持殊の意義を論じてゐる。私は、今これら、就中ケイの上記の一篇を中心として所謂民衆藝術なるものゝ意義と並びにそれに伴つて觀察さるべき價値とを少しばかり考へて見ようと思ふ。

二

或ひは民衆のためといひ、或ひは平民のためといふ。この場合、私たちの注意の燒點は依然としてやはり民衆乃至平民といふ言葉の含む概念そのものにある。これらの言葉は今も一言した通り、中流階級以下最低級の勞働階級のすべての人を含んでゐる。しかしケイ女史並びにロオラン氏は、特に最も多く、下流階級及び最低級の勞働階級の人々といふことに力點を附してゐる。從つてこの二先覺に依つて提唱された民衆藝術とは、とりも直さず勞働者のための藝術といふことに外ならないのである。さて、これら先覺者たちはどういふ立場で、どういふ態度で、又どういふ論旨で、勞働者階級のための藝術を主張してゐるか。

エレン・ケイの『更新的修養論』の一篇は、最も鮮かに、最も推理的に、又最も情熱的に以上の疑問に答へてゐる。こゝに改めて贊するまでもなくエレン・ケイといふ人は、「人生の使徒」といはれるほどの人生の熱愛者であるだけ、とりわけ勞働者とか、下流社會の人々とかに對しては、常に慈母のやうな溫情を向けてゐる人である。女史は、現代の社會、殊に勞働者階級の社會の慘めさと醜くさとを、人一倍深く感じ、そして人一倍深くそれを憐んでゐる。そこには——中流階級も無論さうではあるが勞働者階級は殊にさうである—烈しい生活難がある。物質上の不滿の甚だしいものがある。そこには勞働の過勞があるばかりで、それに報いるに足る何等の慰安も何等の娛樂もない。そこには勞働の極端な專門化と極端な機械化とがあるばかりで、人間と人間とが互ひに抱き合ふやうな情味や、人間としての生の享樂などいふことは藥にしたくもない。彼等の生活は全く文字通りの意味における荒れ果てた沙漠を瓦るやうな生活である。そしてかゝる枯れ果てた、情味のない、潤ひのない、味ひのない生活を送りつゝある彼等は絶望的に、低劣な、不生產的な快樂に沈湎して、そしていよ〳〵ます〳〵個人としても、衆團としても、彼等は頽廢し墮落してゆく。そして、いよ〳〵ます〳〵野蠻性を帶び、獸性を帶びた「蠻人（バーバリアン）」となつて了ふのである。ケイはかう考へから、更に進んで、彼等勞働者が、常に、精神上の統一がなく、又、その「風習が粗野であり無作法である」こと、及び「何等の內的感激なしに友人と交つて居り、彼等に取つて適當である以上に多く物を食つて居り、彼等の趣味に合はない着物を着て居り、彼等が得る以上の金を費して居る」こと

とか、又は、彼等が彼等の生活に對して「さま〳〵の異つた部分を統一した一種適當なる均整、並びに彼等自身とその內的人格との間の調和にまで到達する」上の何等の計畫を持つてゐないことなどを一々指摘してゐる。要するに彼等勞働者には慘めさと醜くさとがあるばかりである。

蓋し、彼等勞働者階級の人々の如上の慘めさと醜くさとを救ふにはどうすればよいか。エレン・ケイは次に思索をこの問題に轉じてゐる。女史の考へるところに依ると、彼等勞働者を救ふべき唯一の道は彼等を「教養する」にある。彼等個々人の生活の樣式が「一層完全な諸形式を獲得する」ように彼等を教養するにある。そしてかく彼等を教養するためには、彼等のその靡爛し疲弊し、困憊してゐる心身に何よりも先づ一種の清涼劑を與へることに依つて始めなければならない。そしてこの場合の清涼劑とはとりも直さず、彼等の心身に「更新」（リクリエーション）を與へるところの快樂である。女史は、この心身に「更新」を與へる快樂といふことを、更に別な言葉で、それはその人に「活動性」（アクティヴィティー）を與へる快樂、乃至「生產的」な快樂、すなはち、精力の消費と供給との釣合のとれる快樂、「思想感情、意志を一層充實させるやうな快樂、更に新たな精神で、人生のもろ〳〵の仕事に奮鬪させるやうな快樂」更に一言で云へば所謂「生の增進」を贏ち得るやうな快樂であると云ひ、轉じてから云ふ更新的快樂が現代の殊に勞働階級において等閑に附せられてゐることを衷心嘆いてゐる。ケイ曰く、

「あらゆる階級の中の大多數の人々は空虛な快樂に身を委せてゐる。けれども、かくの如く空虛な快樂に身を委せることは勞働者の階級において最も甚だしいのである。蓋し劣等なる快樂に耽ることに依つて精神的に害を蒙るといふことは、單に勞働者の階級ばかりでなく、すべての階級の各個人に取つて有害であることといふまでもないが、しかしながら、「第四の階級」たる勞働階級——人間全體の直接の將來の問題がその手中にある——がさういふ精神的害を蒙るといふことは人類全體に取つて遙かに有害であるからである。勞働者の階級は、彼等の仕事に對する活力を增進させ强固にするためには、いかなる方法でも用ゐようとしてゐる。從つて彼等勞働者が現に享樂してゐる空虛な閑暇又は彼等が得ようと望んでゐる餘暇の增加は、實際において無價値な娛樂のために費さ

れてゐるか、或ひは又は眞の更新のために、すなはち肉的又は心的なさま〳〵の力の更新のために費されてゐるかといふことが最も重大な問題である。」

生活が切迫すればするほど、人生が索漠になればなるほど彼等勞働者は絶望的に空虛な、有害な、不生産的な快樂に身を委せるやうになる。彼等は「彼等の生活の樣式が、常に彼等の、より高い人生觀及び常に美に對するより深い感覺を與へるものであるか否か」などいふことについては何等の注意をも拂つてゐない。彼等はたゞ「大口を開いて笑つてさへ居られゝば、又は騷々しく騷いでさへ居られゝば、または酩酊したり夢中になつたりしてさへ居られゝば、それで彼等自身を享樂してゐる」といふのである。そしてそれが彼等自身の靈魂と肉體とに、如何云ふ惡影響を與へるかといふことについては何等の責任感をも感じてゐない。事實又彼等勞働者はさういふ責任感を感じ得ないほど切端詰つた狀態にゐるのである。乃至さういふ責任感を感ずるには餘りに彼等は心身共に疲て果てゝゐるのである。併しながら、かういふ心身の困憊疲勞の狀態は、いかやうにしても改變されなければならない。彼等の外的狀態、すなはち彼等の勞働が彼等に適當なる配當を齎し得るやうな狀態に彼等の境遇を改造することが無論必要な重大事ではあるが、それと共に、彼等の內的狀態、すなはち彼等が個人として乃至社會の成員として一種教養ある人間としての內生活を送るやうに彼等を向上させなければならないのである。彼等をして、彼等自身、より價値なきものに對してより價値あるものを犧牲にしたり、またはわるいさま〳〵の習慣に無感覺であつたりするといふ境地を脫することに依つて、または無知な行爲を斥けて高尙な行爲を選ぶことに依つて、または空虛な享樂を斥けて生産的な享樂を選ぶことに依つて、「たゞに一個のよりよき人間となるばかりでなく、その社會的理想の上から云つても一層よい理想の奉仕者」とならしめるやうな、さういふ教化乃至教養を彼等に與へなければならないのである。

蓋し、彼等勞働階級の人々をして、かくの如く教養ある人々たらしめるところに、換言すれば如上更新的快樂を彼等勞働者たちに與へるところに、現代に於ける教化運動の最も重大な意義があるのであるが、それと共に、かゝる教化運動の機關たらしめるところ、そこにこそ、所謂民衆藝術なるものゝ最も根柢的な意義があるのである。とかうケ

イは考へてゐる。

三

エレン・ケイの教化機關乃至教化樣式としての藝術といふことから、直ちに思ひおこされるのは、かの近英の大批評家マシュウ・アヽノルドがその著『教化と無秩序』の中に於て力説してゐる主張である。

マシュウ・アヽノルドは近代の思想家中、最も多く教化の必要を高潮して、その時代の思潮及び風習のすべての分野に瀰漫してゐたバーバリズム乃至フィリスチニズムに向つて痛烈に批難の矢を投げ與へた人である。彼れは「教化」といふことを以て「現代をして更によりよく、より幸福な世界たらしめようとする貴ぶべき渇望」に根ざした社會的な動機から生れた努力で、一言で云へば「完全といふことの研究」であると云ひ、そしてこの「教化」の中心要素は "sweetness & light" であると論じてゐる。「教化は人間の一切の階級の區別を排除しようとする。それはこの世において知られた最善のものを、いづこいかなるところにも傳播しようとする。すべての人をして優雅（スウィートネス）と光明（アンド・ライト）の雰圍氣の中に生活させようとする。」彼れはまた次のやうにも云つてゐる。「教養ある人とは社會の一端から他の一端へ、その時代の最善の知識、最上の觀念を傳播させ、普及させようとする情熱を持つてゐる人の謂である。すべて粗笨な、卑俗な、難解な、抽象的な、職業的の排他的知識を取り除いて、それらに代らせるに、ヒューマナイズされた知識を以てする人の謂である。」アヽノルドはかう云つて教化の必要を力説し、高潮し、そして、それから牽いて教化の一要素としての文學藝術の効果を暗示してゐる。

尤も、アヽノルドが教化力説の對象としたのは、今からは四五十年も前の當時の英國一般の社會であつて、ケイのやうに特に「民衆」「平民」又は勞働者階級といふやうに、ある限られた社會階級に燒點を置いたものでなかつた。從つてまた特に民衆のための藝術といふことの主張もアヽノルドにおいては鮮かには見られなかつた。とは云へ、彼れが、いち早く今から半世紀も前において、一般の社會の文化の廢滅を認めて、それを痛嘆し、新たに文化教養の必要を力説したのは流石に一代の卓見と云はなければならぬ。ケイ女史並びにロオラン氏等の主張も、その對象の範疇こそ異なるが、一は平民階級、一

は一般社會といふ――教化を說き、文化を說き、教養を說くその根本要求乃至態度に至つては共に軌を一にするものである。

たゞし、ケイ女史やロオラン氏等がこの教化運動を殊更に平民又は勞働階級の人々に連關させて考へたのは、一つは前にも一言したやうに、現代における勞働者階級が殊にケイの所謂「更新」を必要とするからであること云ふまでもないが、一つはまたこの二先覺が平民又は勞働者そのものに極めて文化の進展上重要な意味を認めてゐるからであることまた云ふまでもないのである。前に擧げたケイからの引用文に依つても明かであるやうに、ケイは勞働者階級を上流乃至中流の階級などよりも遙かに文化の進展上に重要視して「人類全體の直接の將來」が一に彼等の教化の如何に懸つてゐると云ひ、ロオラン氏亦「たゞ〳〵第四階級たる勞働階級が社會的改革と道德的改革とを遂行し得るときこそ、私たちは眞に新しい社會を獲得する時である」と宣明してゐるが、すなはちこれに依つても、ケイ女史やロオラン氏がいかに勞働階級そのものを重要視してゐるかゞわかる。同時に、これら先覺者たちの所謂民衆藝術なるものが、とりも直さず勞働階級のための藝術といふことの別名であるといふ理由も亦おのづから明かになるわけである。

そして又同時に、ケイ女史が「藝術といふ言葉の適當な意味における藝術とは、すべての民衆の生活をして、次第々々に豐富ならしめ、現在よりは一層完全な將來の實在といふことの直覺を呼びおこすやうな藝術」と云つてゐる藝術、ロオラン氏が「再生の湯船にも比すべき藝術、人間相互の間に一層親密な羈絆を創造し、個人々々の間に一層偉大なる勇氣を創造するやうな藝術」と云つてゐる藝術、乃至はやはりロオラン氏が「藝術をして一切の壓制、一切の卑俗、一切の惡德を憎惡する一念を民衆に喚起せしめよ。そしてそれと同時に各個人をして、更によりよき理解に於て融和せしめ、各個人相互をして、更により深厚な同胞感を抱かしめるものたらしめよ」と云つてゐる藝術、さう云ふ藝術を、何故にケイ女史やロオラン氏等が民衆藝術の主張として掲げ出してゐるかといふことも容易に推測し得べきことである。

四

以上で、所謂民衆藝術なるものゝ意義、換言すればその目的觀の上から見た意義の大

よそを述べ終つた。すなはち一般平民乃至勞働階級の教化運動の機關乃至樣式としての所謂民衆藝術の意義といふことの大よそを述べ終つた。次に問題となるのは、民衆藝術そのものゝ形式である。言葉を換へて云へば如上民衆藝術たるためには、いかなる形式の藝術が最も効果があるかといふ問題である。詩、繪畫、彫刻、音樂乃至演劇の何れが果して最も多く効果があるかといふ問題である。無論これらの藝術形式は本質的に云へば、それ自らに於て、すでに民衆藝術たる可能性を持つてゐる。しかしながら、苟も民衆藝術といふことを力說する以上、その「民衆のため」といふことの條件に準じて、そこに適不適の形式の生じて來るのは自然のことである。この立場から見るとき民衆藝術として最も好適なものは云ふまでもなく演劇乃至演劇類似の藝術である。といふのは演劇は今更云ふまでもなく所謂綜合藝術の最好典型であつて、最大多數の最大快樂を贏ち得るものであるからである。そして又こゝに云ふ「民衆のため」とは、前にも屢々述べたやうに勞働階級の人々のためといふ意味であるから、その藝術は、所謂「高等文藝（リベラル・アート）」とはちがつて、彼等勞働者にもよく鑑賞され、理解されるほど、普遍的な、非專門的なものでなければならない。從つて、民衆藝術の最高典型は、最も普遍性を帶びた、そして通俗的な演劇であつて、而も如上教化運動としての價値あるものでなければならないと云ふことになるのである。

ロマン・ロオラン氏の『民衆劇場』は云ふまでもなく、最近獨逸、佛蘭西あたりで切りに提唱される民衆劇場なるものは、何れも如上の條件に適した演劇を上演することにその最善を盡してゐるといはれてゐる。例のオーベルアンメルゴオの受難劇（パッション・プレー）の如き、又はその他、現に獨逸、瑞西などの各地で流行してゐる「野外劇場」の如きも亦、その目的とするところは如上の民衆教化にあるといはれてゐる。そしてこの種の所謂民衆劇場及び所謂野外劇場の多くは、すでに今日、民衆藝術としてそれ〳〵にその効果を收めてゐるといはれてゐる。

エレン・ケイは、民衆藝術の一形式として――といふと語弊があるかも知れないが、少くも民衆藝術たり得る要素として――如上演劇の外に、活動寫眞、素人芝居、年中行事等をも數へてゐる。たしかに、これらのものは勞働階級の教化運動としてはその利用

の仕工合に依つては極めて効果のあるものである。ケイは素人芝居を以て、勞働階級の青年男女が、依つて以て最もよく自分の活動性を表現し得るものであるといふことを例證評論し、又年中行事といふことも、仕方に依つては、「老人をして追懷の中に幸福を感ぜしめ、青年をして勝利の中に幸福を感ぜしめ、乃至小兒をして同樣な希望の中に幸福を感ぜしめ」たり、その他索漠たる人生にさま〳〵の色彩と味ひとを附加するものであることを述べてゐる。この點においては云ふまでもなくケイの見解は肯綮に中る。もし夫れ、活動寫眞が勞働階級に取つて教化的立場から最も効果の多いものであるといふことはケイを待つまでもなく、誰人も容易に推測し得ることである。しかしケイは、一面に於て、活動寫眞が今は墮落してゐること、すなはちその映畫の多くが、徒らに卑俗であり、徒らに猥褻であり、徒らに挑發的であつて、却つてこれに依つて現代の勞働階級の人々の多くが惡形響を受けつゝあることを認め、その點に向つて痛烈な批難を加へ、心ある人々は「社會民主々義が資本家たちの無法の徵收に、斷乎として反對するとおなじく、かういふ娯樂上の興行主の無法の徵收——性格、知識、感情の——にも斷乎として反對しなければならない」と云つて、活動寫眞をして何よりも先づ教化運動の具、すなはち民衆藝術としての活動寫眞たらしめることを力說してゐる。これ又肯綮に中る主張であることといふまでもない。

民衆藝術は、上來述べた通り、所謂「高等文藝」乃至專門的な豫備知識を持たなければ了解されないやうな高級藝術とは全然異つたものである。私は今こゝにこの兩者の價値を比較しようとするものではない。しかしながら、通俗的であり、非專門的であるといふの故を以て、所謂民衆藝術そのものゝ價値を無みしてはならない。否、「新社會的環境の創造力」の暗示とし、機緣としての藝術といふことを高潮してゐるかのギュヨーなどの社會學的美學の立場から云へば、寧ろ、民衆藝術そのものこそ、最も價値ある藝術となるわけである。實にギュヨーの所謂新社會的環境創造の機緣であり、乃至彼等民衆に取つての「よりよき生活へ」の暗示であるところに所謂民衆藝術の一切の價値がかゝつてゐるのである。

翻つて思ふに、我が國の現時の狀態の如き、とりも直さず、また、如上民衆藝術を最

も多く必要とするものではないであらうか。私たちは今更のやうに、この偉大なる先覺者エレン・ケイやロマン・ロオランの叫びに耳を傾けずには居られない。

第三章　ウィリアム・モリスの民衆藝術論

一

嘗て生活の藝術化といふことが一部の人に依つて唱へられたことがあつた。嘗て藝術の生活化といふことも一部の人に依つて唱へられたことがあつた。しかしこの二つの提唱は、各々それ自らの獨立した提唱としては今日の吾々に餘り多く重大な意義を齎らすものではない。今日の吾々に取つてはこの二つの提唱は、あたかも楯の兩面の如く一にして二、二にして一といふやうな關係のものであらねばならぬ。何となれば生活を藝術化するといふことは、生活化された藝術で、生活を藝術化することでなければならないからである。從つてこの二つの提唱の根本問題は、生活に依つていかに藝術を調整し、藝術に依つていかに生活を調整するかといふこと、換言すれば生活と藝術との調和といふことにあらねばならぬ。そしてこの生活と藝術との調和といふことに含まれてゐるさまざまの問題を最も徹底的に又最も具體的に考察し、主張し、それを更に進んで實行に